

旅のスケッチ

# オーストリア美術館の 所蔵作品になる



さかもと ふ さ

( 型絵染版画家、エディター )  
イラストレーター

今年私の作品「エゴンシーレが見た風景」オーストリアのメードリンクミュージアムの所蔵作品となった。十一月五日から二十一日まで「エゴンシーレ・クリムト展」に展示された。

ウィーンの森の南部に位置するメードリンク市のミュージアムは日本と関係が深く、クーデンホーフ光子の石庭が名古屋の造園家によって造られた。クーデンホーフ光子は明治初期にオーストリア、ハンガリーの外交官ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵に見初められ、日本人初の伯爵夫人としてヨーロッパに渡った人だ。晩年をメードリンクで過ごし、このメードリンクで亡くなった。光子の次男リヒャルト・クーデンホーフがヨーロッパ統一の礎となった「パン・ヨーロッパ運動」を提唱した。そのリヒャルトの母である光子も「パン・ヨーロッパの母」と呼ばれている。

# マルメロ



永岡 慶之助  
(作家)

私は、この数日の間、ある果物の名前を思い出すのに苦労した。

レモンやメロンと似た名前なのが、どうしても思い出せない。果ては、栗菓子のマロングラッセまで思いを巡らせた。

突然、「マルメロ」という言葉が、頭に浮んだ。「あつ、これだ!」と、私は声を出した。

私が、この名前を聞いたのは、確か、小学校四、五年生の時のことだった。

ある朝、寝ぼけながら遅刻しそうになったので、町裏の近道を通り抜けた時のことだった。小川が流れている小道で、ふと見ると、一本の木が繁っていて、葉陰に何やら、ぶら下がっているのが目に付いた。その時は、そのま

ま行き過ぎたが、しばらく日が経って、またその道を通ると、まだ、その

薄黄色の果実のようなものが一つ、枝に下っているのを見つけた。どうも気になって、近づいて見てみると、梨のような形状であった。食べられるかもしれないと、枝からもぎって、家に持ち帰った。さっそく齧ってみると、おそろしく堅い。これではカラスも突っつかないはずだ。そこに来あわせた大人が云った。

「お、これはマルメロだ!」

これが、私がマルメロを知った最初である。おもえば、古いく遠いく昔の話である。

どうしてこんなことを思い出したのか。これは、どうやら久しぶりに電話

を寄こした、同郷の知人が、子供時代の話をしたのに触発されたものであった。

マルメロは、ポルトガル語だが、原産地がイランからトルキスタンで、ギリシャ・ローマ時代には、南欧で栽培されてきた果樹で、西洋梨の原種にあたるそうだ。日本へは、寛永十一年に、長崎に入つて来たようだ。

どうして、そのような果物の木が、東北会津盆地の片すみの、宿場町の裏通りにある小川のほとりにあったのか、不思議というほかない。長崎から持たしたのは何者か?。ひよつとすると「講」によつて「お伊勢参り」あるいは「高野山詣で」をした者たちが、立ち寄った江戸で、種か苗木を買い求めたものか、私の想像は広がっていく。因果な性分である。はるかなる長崎と会津盆地を結んだのは、いつ? 誰れが? あれこれ想いを馳せるうちに、ふと、会津藩士酒井文吾という人物の名前が浮んだ。

幕末、会津藩主松平肥後守容保は、

京都守護職を拜命された。文久二年八月（一八六二）のことであった。藩兵一千名を引き連れ、京都に上洛したが、諸藩や浪士を威圧するためには、刀槍・鉄砲などの武器の新調、藩兵の支度金、家族への臨時手当など莫大な金額の支出を強いられた。そこで、長崎の御用達商足立屋仁十郎から、三万両の大金を借金することとなった。その大役に、白羽の矢が立ったのが、酒井文吾であった。

酒井文吾は、国産人参方という役職で、会津若松と長崎を頻繁に行き来し、足立屋仁十郎とは昵懇の間柄であった。

朝鮮人参は、三代藩主正容が御薬園に試植したことから始まり、藩の主要な特産品として専売制をとり、長崎の足立屋とは、長く取り引きをしていた。藩の一大事である金の工面を、一人の下級役人に望みを託したのも、天下が不穏なこの時期、京都守護職を任せられた会津藩の威信を保つためであり、最後の頼みの綱が、酒井文吾というわ

けであった。

会津若松から京都へ呼び出された文吾は、重臣たちの強い期待と共に、急ぎ長崎へ向った。長崎に到着するなり足立屋へおもむき、仁十郎と対座した文吾は、開口一番、

「会津藩に、どうか三万両 お貸しください！」

しかし仁十郎の答えは、

「他でもない会津様のお願いですから、二万両なら御用立ていたしますが……」

京を出立する際に、重臣たちに強く「三万両借りて来るのだぞ！」と云われてきた文吾は、

「ぜひに／＼三万両お貸しください!!」と、何日も屋敷をおとずれ、頭を下げつづけたが、仁十郎は首をたてにはふってくれない。そのうち、文吾の長旅をねぎらう宴をもうけてくれた仁十郎が、したたか酔った勢いで、

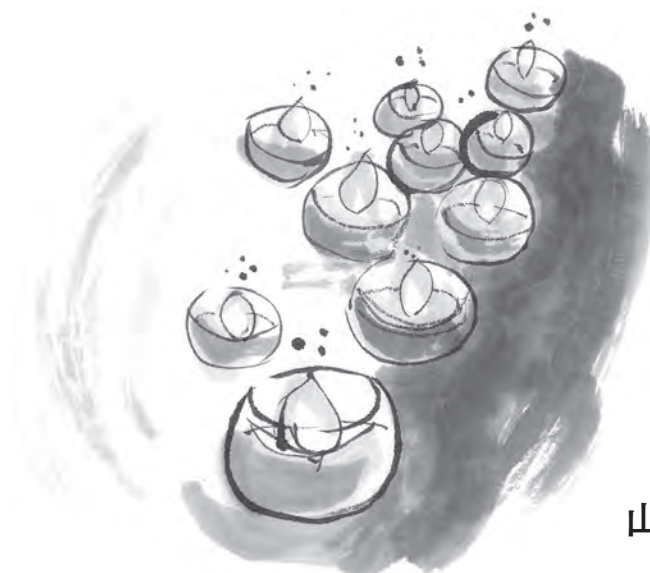
「文吾どの、その八杯のギヤマンの盃の酒を総て、飲み干してごらん下さいませ。さすれば、三万両、御用立て

いたしましょう！」と提案してきたのだ。

文吾は、会津でも有名な下戸で、藩政で多くの蔵元をかかえる土地柄で、呑ん兵衛も多いのに、文吾ときたら一滴も飲めず、酒の席ではいつも、隅で水を入れた盃をなめているほどであった。そんな文吾を知っている仁十郎は、今もカステラに目を細めている文吾を、からかって云ったのだが、三万両と聞いた文吾は、迷ったものの、仁十郎が止める間もなく、八杯の盃を、つぎつぎに飲み干した。

「お約束の三万両、確かにお借り申す！」と云った後、ひっくり返った文吾が、三日三晩苦しんだことは、云うまでもない。

見事役目をはたした文吾が、京都經由で会津へ帰還した時、その荷物の一すみに「マルメロ」の一枝が入っていたとしたらローマンがあるではないか。「マルメロ」という心に残る名前の果樹は、今も、あの小川の土手にあるだろうか。



## 山本千明

(ECC英会話講師)

ここ香川県で、様々な音楽ライブを幻想的な演出でサポートしている女性がいる。

キャンドルアーティストの稲崎小百合さん。ボサノバデュオ、若手尺八奏者、ピアノプレーヤー等が奏でる静寂で清らかな音律が、彼女のキャンドルのゆらめきに調和して、心の裏に染み込んでくる。キャンドルそのものは、あくまで「演出」の一つであり、イベント紹介のポスターに製作者の名前が記されることはあまりない。そしてご本人は「小百合」という名のごとく、控えめで清楚。決して「私！私！」と前面にしゃしゃり出るタイプの方ではない。それでも一度、彼女の作品を目にすると、さりげない「物腰」ながら、何故か「確かな存在感」を印象付けられる。

彼女のしなやかな手から生み出される幾つものキャンドル達は、シンプルでスタイリッシュ。個性的だが、色彩やシルエットに品格を纏う。

野外のイベントでは、背景の木々や

花、水辺や石を穏やかに照らして浮かび上がらせる。

私が勝手に「かぐや姫の竹」と呼んでいるキャンドルも魅力的だ。スツと竹を斜めに切った形状で、内部に設えた芯に火を灯すと、そこにかぐや姫が居るかのごとく、内側から暖かな光がゆらめいてこぼれ出す。これは、平成二十五年の瀬戸内国際芸術祭、高見島「海のテラス」での尺八、キーボードによるライブで用いられ、幽玄なる世界を創り出していた。

室内でのディスプレイ用に「EARTH」という作品がある。青と白と薄緑色の口ウが見事に球体の中で層を成し、キャンドルとしては勿論のこと、ただそのものを眺めるだけでも「アート」として楽しめる。「青く澄み渡る空と海、流れる雲、そよぐ風、地球の色と形で表現しました」と説明書にあるように、神秘的で美しい。

気がつけば、私達は今、あらゆる「刺激的な光」に「包囲」されている。テレビ、パソコン、蛍光灯、ネオ

ン、携帯、車のライトと、一日中、目の奥を刺すような人工的な光に晒されて、急がれ続け、いつしか、「ゆつたり」や「ぼんやり」という時間をどこかに置き忘れてしまったようだ。

慌ただしい一日の終わりに一時だけ電気を消してキャンドルに火を灯す。闇の中に優しく生まれ出る明りは、ただそこに「在る」だけで「憩い」の空間を創り出していく。時計の針さえもゆつくりと歩み始めるような、心身共に和らげる世界が現れる。

小百合さんご本人は「山育ちなので、実は『海の幸』があまり食べられないんです」と言うように、大自然に囲まれて生まれ育つたらしい。彼女の作品が持つ飾り気のないナチュラルさは、そこがベースになっているのかもしれない。

今現在、大学生の息子さん、高校生の娘さんの「母」であり、毎朝お弁当作りから一日をスタートさせる「主婦」でもある。

そんな彼女とキャンドルの出会い

は、結婚、出産を経て織り成されるリアルな生活の中にあつた。子供の成長と共に、未来の自分の輪郭が描けない毎日。自分は何をしてどう生きていくべきか―日々の模索の闇の中に、ある時、一筋の光が差し込んできたのである。

正にキャンドルの「光」そのものに興味を持ち始めて独学からスタート。やがて大阪の「salondeleona」主宰の葉山朋美氏に師事し、二〇〇九年に講師養成講座を修了、ディプロマを取得。その後、HANDMADE Candleistyle代表として、キャンドルの制作やレッスン、イベントの演出、と独自の道を切り開いて、今に至る。

制作上、最も難しいのは、「蠟を流し入れる、温度管理とタイミング」と彼女は言う。同じように彼女は、人生の中で、絶妙なタイミングで「キャンドル」に出会ったのかもしれない。周囲との「温度」というバランスを計りながら、今の仕事を形にしてきた。

母であり、妻である彼女が「人生後半」の方向を決めかねて迷いの中に居た時期に、静かに一直線に、「キャンドル」という「芯」を中心にセットして、そこからゆっくりと丁寧な「型」を固定したように思える。

小百合さんにとつてキャンドルの一番の魅力は？と問うと、こんな答が返ってきた。

「その光の意味するところ、感じる人それぞれの内側に、言葉もいらない、ただその光で癒される、その深いものを感じ取っていただければと思います。暗闇に閉ざされた世界に一筋の光はまさにやすらぎと希望を教えてくださいます。私がこれまで歩んできた時間も、そろそろ人生の折り返し地点：これからは人と人との繋りや縁をキャンドルというツールで丁寧に大切にしたいと思っています」

彼女の言葉の中には、何度も「ツール」という表現が出てくる。即ちキャンドル制作は「ゴール」ではなく、「プロセス」なのだ。

彼女の忘れ難い企画の一つは、踊絵師、神田サオリ氏とのコラボ。理由は、「描かれてゆく過程そのものが芸術。作品のレベルの高さ。プロ意識と素晴らしい感性。ステージを降りると柔らかく素敵な女性。すべてが魅力的」彼女自身の目標に通じるものがあつたのではないだろうか。

小百合さんの夢は？と訊けば「瀬戸内海の島々を舞台にキャンドルナイトをすることでしょうか」と微笑んだ。

「人の為に」と差し出した燈りが、今、彼女の行く道も明るく照らし出しているようだ。





# 氏神さまの秋祭り



宮本 富夫

(高松大学 名誉教授)

鉦と太鼓のリズムと獅子舞、奴の掛け声、そしてお下がりの神輿、幼い頃の秋祭りの思い出。お下がり先の御旅所では、ひしめきあう獅子の乱舞。何組もの鉦と太鼓のリズムが重なり、うなりのような音が山に響く。宵祭りの夜もそうであった。山全体がうごめいているように神社の境内がうなりをあげる。原体験となつているのだろうか、ありありと思ひ浮かぶ。

この秋は、氏神さまの秋祭りのお世話が私の住む集落に巡り来る。十五年振りという。祭りのお世話に、少し責任ある立場からかわるご縁を得る。

勤めにかまけ、氏神さまの秋祭りから随分と距離を置いてきた自分に気づく。地域の大切な伝統行事について、正確な知識と理解をほとんど持ち合わせていないと知る。幼い頃、大人の会話から音として耳から入ったものが頭に残るも、ほんの少し。その多くも正しい意味については不明。初めて耳にするものがほとんど。頭屋、頭人、おはけ竹、小竹、八つ脚、神器、注連延祭、神の枝芯、袴、白丁、紙垂、唐櫃、真榊、神鏡、和幣、荒幣、金幣、白幣、等々。そういったものが、祭りの準備作業においてごく当たり前のよ

うに交わされる。名称と物が頭の中でうまく対応しない。名称と作業も対応が難しい。戸惑いと確認。こんなことなら、昨年の祭りの進行の一部始終をきちんと見ておくべきだった。後の祭りである。宮司さんの説明を受けながら、イメージわかず。ピンとこないもの、感ずる。周囲の人たちが、戸惑うことなく、こともなげに作業をこなしている。そんなものかと思いつつ、共同作業に加わる。それぞれが、「ああでもない、こうでもない」と言いつつ、てきぱきと作業に取り組む。リーダーを特に必要としない。正確な理解を持ち合わせなくとも、共に作業をこなしている自分に気づく。集落で行われる共同作業のよさなのだろうか。氏神さまの祭事にかかわることがもたらすよさなのだろうか。

祭りは、頭屋宅での注連延祭から始まる。準備は、祭り前日に竹を切り出すことから。十一節以上の真竹を、先の部分を残して枝を落とし、おはけ竹へ。おはけ竹は、三方から太目のわら

縄で支持され、祭り当日、頭屋宅の庭に立てられる。竹の先に残る枝葉の少し下に、白扇を三枚用いて作成した円形のものを中心に鏡を固定した飾りが付けられる。飾りには麻が使われ、取り付けにも麻ひもが使われる。飾りは宮司さんの手作りとか。鏡の正面は、神社の社殿の方角にむけられる。神さまが頭屋へ降臨されることと関係しているらしい。八尺程度の小竹が八本用意される。小竹は門、玄闕、井戸の周圍に使われる。すべて注連縄と飾るため。門、玄闕、井戸、かまどで宮司さんによるお祓いの儀が、神事に先立って行われる。お供えは、酒、塩、洗米など。そして床の間に用意された神床に、山の幸、里の幸、海の幸を載せた三宝が供えられ、注連延祭の神事が執り行われる。地区の来賓と頭屋の氏子が参列し、舞姫による舞いが奉納される。注連延祭の翌日からは、頭屋宅での早朝の神事が行われ、神事後、参列者はなおいとしてお神酒をいただく。このお酒がとてもおいしい。不謹

慎なことかもしれないが、「朝寝、朝酒、朝湯が……」のくだりの主人公の気持ちをご想像してしまう。朝の神事は、宵祭り当日まで七日続く。毎朝、心ゆたかにさせていただく。清々しさとゆたかさ、不思議な気持ち。すべてが初めての体験。そして宵祭りを迎える。宵祭りの朝、拝殿の幕張、新しい注連縄の飾りつけ、幟を立てる、ご神燈の紙の張り替え等が行われ、準備が整えられる。神輿がお蔵から一年ぶりに出され、拝殿にて飾りつけがおこなわれる。ご神燈のろうそくに火が入り、ほのかな光が参道と境内を照らす宵の口、宵祭りの神事が執り行われる。本祭りの裃役が正殿に並び、頭屋の氏子が参列する。舞姫による舞いが奉納される。拝殿前では獅子舞の奉納。この夜は、宮司さんと氏子の数名が夜を徹して拝殿にとどまり、神輿のお守りをする。宵祭りは頭屋の祭りとしてされる。こちらですべてが初めて知ることそして体験すること。

翌日の本祭りには、本殿祭神事、神

の膳の儀、出御旅殿、御旅殿祭と執り行われる。奴が露払い、唐櫃、神器をもつ裃、そして神輿の順で、お下がりもつ裃、そして神輿の順で、お下がりが進行する。唐櫃、神輿は白丁役の若者の手に委ねられる。奴の前には獅子舞が何度となく、心ゆくまで舞われる。御旅殿での神事、獅子舞の競演を経て、神輿は正殿へ帰る。裃が参列する神事が執り行われ、本祭りが終了する。

還暦を何年か過ぎ、はじめて秋の例大祭の一部始終をほぼ体験する機会を得た。祭りのおおよそを知ることがかった。頭屋の氏子一つになって、準備、進行、後片付けにてきばきと取り組む姿に、ある種の感動を覚える。氏神さまのおかげなのだろうと思わずにはいられなかった。氏子のそれぞれが、それぞれのありようでかわり、それぞれに達成感を覚え、喜びを感じた。秋祭り。ある種の不思議さを感じさせられた。大切なことが守られ、続けられることを願う。



## 渋谷・金王八幡宮



池田 一 貴

東京・渋谷といえは若者の街、ファッションの街というイメージが強いが、毎年九月中旬になると、この混雑する街をいくつもの神輿がねり歩き、法被姿の老若男女であふれ返る。祭りの二日間だけは渋谷も、日本のどこにでもある秋祭りの街になってしまうのだ。

その祭りの動画がインターネットのユーチューブというサイトで見られると教えてくれる人がいたので、早速のぞいてみた。

なるほど、円山町会だの柳通り商励会だのという提灯をつけた各町の神輿が、渋谷駅前からセンター街などの雑踏を威勢よくねり歩く。ソイヤ、ソイヤか、ヨッサ、ホイサか聞き分けられぬが、大きな掛け声を発しながら、汗をほとばしらせる氏子たちの勇ましい姿がそこにあつた。

神輿をかつぐ氏子のなかには若い女性もいる。女性だけでかつぐ「おんな神輿」もある。男女混合の神輿のなかには白人や黒人も混じっている。いかにも現代風で国際的だが、みなそれぞれ町内会や商店会の揃いの法被を着ていて、これが日本の祭りだといわんばかりである。

夜の場面では、さして広くない辻で二つの神輿が遭遇し、人の渦ができた。掛け声は一段と強く

大きくなり、すわ衝突かと手に汗を握ったが、たがいに正面すれすれにまで近寄って、神輿を左右に大きく揺らす。どうやらエールの交換をしたらしい。微笑ましく、つい顔がほころんだが、同時になぜか胸がジーンとした。

ああ日本人に生まれてよかった、と訳もなく思う。これが日本人なのだ、祭りこそが日本なのだ、と感じた。規模の差こそあれ日本中で祭りが続くかぎり、神社も、日本人も、廃れることはないだろうと思つた。

この渋谷の秋祭りは、金王八幡宮の年間最大の例大祭である。九月十四、十五の両日におこなわれ、渋谷のど真ん中で正装した神官が祝詞を奏上する場面もあった。浅草の三社祭りほど有名ではないが、この祭りは九百年も続いているという。金王八幡宮の御祭神は応神天皇である。金王は「こんのう」と読む。金剛夜叉明王の上下各一字を取って付けた名称だから「こんのう」なのだ。その由来は後述する。

応神天皇といえ、よく知られているように神功皇后の皇子である。神功皇后が懐妊中の身で三韓征伐の陣頭指揮をとって成功をおさめ、日本へ凱旋したその帰途、筑紫の宇美（現在の福岡県糟屋郡宇美町）で出産した子が応神天皇であった。

母の胎内にいたときから皇位に就く宿命にあった方なので「胎中天皇」とも称された。

八幡宮、八幡神社など八幡神を祀る神社は全国に四万四千社もあるといわれ、神社としては最も多い（稲荷神社がこれに次ぐ）。清和源氏が八幡神を氏神としたことにより武門の神様として広く信仰を集め、全国に普及したわけである。

渋谷の金王八幡宮の御祭神も前述のように応神天皇だが、おそらく若い見物客らは御祭神の名前など知らないだろう。そもそも金王八幡宮がどこにあるのか知らない人も多い。

そこで、高校生の男子に訊いてみた。まずは前振りとして、有名な明治神宮に関する質問からである。「明治神宮ってどこにあるか知ってるかい」「知ってるよ。原宿駅のそばでしょ」「じゃ、明治神宮の御祭神は誰だ？」「え……知らない」「バカだな。明治天皇じゃないか」「あ、そうなの。おれ知らないで毎年初詣に行ってたよ」「じゃ、金王八幡宮ってどこにある？」「コンノウ？ 何それ」

周囲の若者数人に尋ねてみたが、金王八幡宮を知っている人は少なかった。場所も知らない。みんな東京生まれなのに。

そこで、金王八幡宮を訪ねてみた。

## 二

金王八幡宮は渋谷駅から歩いて十分ほどの場所にある。住所は東京都渋谷区渋谷三ー五ー十二。第一の目印は駅の東側にある渋谷警察署で、そこから六本木通り沿いにすこし坂を上がった所の右手裏にある。

そのさらに東側には実践女子学園高校や国学院大学、広尾高校などがあり、東北側には青山学院の大学、高等部、中学などがある。つまり近隣には学校が多い。

金王八幡宮は道路から石段を十二段上がった所の境内に鎮座している。創建されたころは周囲を見下ろす高台だったという。

祭りの季節が過ぎた今、神社はさぞ寂しい状態であろうと予想していたのだが、あにはからんや平日なのに若いグループが何組もお参りに来ている。境内のベンチでコンビ二弁当を食べている中年男性もいた。

大学生らしい男子二人組に声をかけた。「今日は何かの祭礼で来たんですか」「いえ、別に」「ここへはよくお参りに来るんですか」「初めてです」「誰かに薦められて?」「天地明察です」「えっ、天地明察?」「あの沖方丁(うぶかた・とう)の小説ですよ。映画にもなったでしょ。参拝のつい

でに、映画に出てくる算額を見学に来たんです」「あ、なるほど」

いきなり天地明察といわれて面食らったが、この学生のいった『天地明察』とは沖方丁という若い作家の長編時代小説で、数年前ベストセラーになった本のことである。その後、映画化もされた。その小説や映画に、たしかに金王八幡宮が何度も出てくる。

算額という言葉は、一般にはなじみが薄いと思う。それは絵馬なのだが、描かれた内容が普通と違って、高度な算術(今でいう二次、三次方程式を使って解く数学や幾何学)の問題を提示した絵馬であったり、あるいは問題と解答を併記した絵馬であったりした。

神社仏閣に絵馬を奉納することは広く日本全国でおこなわれてきたが、江戸時代に算額という特殊な絵馬があらわれたことは、世間ではあまり知られていないようだ。金王八幡宮にはその珍しい算額が三枚残されている。

映画『天地明察』では主人公の安井算哲(のちの洪川春海)が、金王八幡宮の境内で算額の問題を解いたり、妻となる女性に出会ったりする重要なシーンが描かれている。

算哲は実在の人物で、もともとは將軍の眼前で

碁を打つ御城碁おぎまの碁方だったのだが、和算好きを見込まれて改暦作業を命じられる。そうして作り上げたのが日本最初の和暦である貞享暦だった。その顛末を描いたのが「天地明察」なので、学生たちが金王八幡宮に参拝し、算額を見学したのもその影響なのだ。

それにしても、江戸時代の人々は一体なぜ難しい数学問題やその解答などを絵馬（算額）として神社仏閣に奉納したのだろうか。

その背景には、江戸時代に和算（日本式数学）が高度な発達をとげた事実がある。そのきっかけとなったのが江戸初期に出版された『塵劫記』だ。これは日常生活に必要な算術やクイズ的算術などを網羅した書物だった。武士も庶民もこの本で算数が大好きになったのだ。これは江戸時代を通じて、いや明治初期まで、長く普及した大ベストセラーであった。

和算の天才、関孝和も幼少時からこの『塵劫記』を独学し、それを基礎に、高度な和算の研究に進んだという。関は、微積分や行列式など、同時代のニュートンやライブニッツが発明した高度な数学を、ほぼ同時に発明していた。

関和孝は日本の数学の元祖といっても過言ではない。

神社仏閣の算額は、こうした和算の専門家から一般庶民の好事家までが、難しい問題を発見したり、問題が解けたりしたことを、神仏に報告し感謝する意味で奉納されたのである。

明治維新後の日本が西洋の先進文明を受け入れ、咀嚼し、習熟していった背景には、国民の識字率の高さと、和算で培った数学的能力の高さが大いに貢献しているのではなからうか。日本国民の知的能力の高さは、すでに江戸時代に世界トップレベルだったのだろう。

それは日本人のうぬぼれではない。幕末に來航した米国のペリー提督は、日本の書籍流通量の多さや、庶民や女子供までが本を読むことに驚き、また工芸品の精巧さに感心し、「この国はいずれアメリカの競争者になるだろう」と著書に書き残している。予言は的中した。

それはさておき、渋谷の金王八幡宮は、江戸の和算家や和算好きの庶民が数学の腕をふるう知的勝負の場だったといつてよからう。

しかし、むろんそれだけではない。話が広がりすぎたので、ここで、金王八幡宮にもどり、その歴史やご利益について述べることにしよう。

## 三

金王八幡宮も他の神社同様、いろいろなご利益が伝えられている。創建から九百年以上も経っているから、さまざまな歴史を背負っており、それにともないご利益も付加されてきた。その歴史の全部を紹介することは不可能なので、三つの話題を取り上げることにしたい。

その一つは創建時の経緯。二つめは「金王」の名の由来。三つめは社殿と神門の建立の事情である。

神社によれば、創建（御祭神の鎮座）は平安末期の寛治六年（一〇九二）正月十五日とされている。今から九百二十一年前のことである。

この創建は八幡太郎こと源義家とのかかわりが深い。もともと義家は、京都郊外の石清水八幡宮で元服したことから八幡太郎と通称したのだが、この時代、武士はまだ権力から遠く、天皇や公卿の風下に立っていた。朝廷の命令によらなければ合戦はできず、仮に命令なき合戦をしても恩賞は受けられなかった。源義家が勝利した後三年の役（一〇八三〜一〇八七年）はまさに勅命なき合戦であり、「私戦」という扱いだっただけ。

しかし、奥羽の形勢を決したこの後三年の役の意味は大きかった。河崎基家は嫡子の重家とともに

に源義家のもとへ馳せ参じ、仙北金沢の柵の攻略に大功を立てた。その恩賞として、武蔵谷盛庄七郷（渋谷、代々木、赤坂、飯倉、麻布、一ツ木、今井など）が与えられた。朝廷からの恩賞がないので源義家はいわば自腹を切って部下に土地を与えた形である。それがちに源氏の結束を強め、玄孫の源頼朝が棟梁として東国武士を束ねる要因ともなった。

河崎基家も重家も、源義家と同じく八幡神を篤く信仰していた。そこで、後三年の役の勝利に感謝する意味で、この渋谷の地に、義家が勧請して八幡宮を創建したのである。

次いで重家の代となり、堀河天皇から渋谷の姓を賜り、渋谷重家となった。さらに当八幡宮を中心に館を構え居城とした。渋谷城である。一説によれば、これが渋谷という地名発祥の由来ともされる。現在すでに城は存在しないが、境内には城砦の石が保存されている。

渋谷重家は子宝に恵まれなかった。そこで夫婦で八幡宮に祈願を重ねた。するとある夜、金剛夜叉明王が妻の胎内に宿るといふ霊夢をみて、待望の男子を授かった。夫婦は喜び、金剛夜叉明王から上下二文字をいただき、子を「金王丸」と名づけた。「こんのうまる」と読む。長じて渋谷常光

となったが、渋谷金丸常光ともいう。

金丸が十七歳のとき、源義朝に従って保元の乱（一一五六）に参戦して大功を立て、その名を全国に轟かせたが、その後、義朝が落命すると、金丸は渋谷で剃髪し、土佐坊昌俊と称して義朝の御霊を弔った。

その義朝の子、源頼朝が源氏の棟梁として挙兵し、平家を討ったが、壇ノ浦の戦い後、頼朝は弟義経に謀反の疑いをかけ、金丸に義経を討つよう命じた。金丸はそれを断れず、自ら死を覚悟して京へ上り、勇将らしい最期を遂げた。

すでにおわかりだろうが、金丸八幡宮の名称は金丸にちなんだものである。

さて、時代は飛んで江戸徳川の時代。家光が幼かったころ、三代將軍はその弟忠長が継ぐと予想されていた。家光の乳母・春日局と教育役・青山忠俊はその噂を憂慮して、渋谷の金丸八幡宮に祈願を重ねた。

その結果、家光の將軍就任が決まり、神のご加護に感謝して、二人は社殿と神門を造営寄進したのである。

以上の歴史から、金丸八幡宮のご利益もおのずと理解できよう。まず八幡神の「武運」が挙げられる。人生は戦いであるという見方からすれば、

あらゆる人生上の問題は武運によって開ける、というわけである。

次に、金丸の誕生の経緯からして「子宝、子授け」のご利益がある。さらに祈願によって徳川家光の三代將軍への就任が実現したことになちなみ、「出世、栄達」のご利益もあるだろう。

また、この地がもともと交通の要衝であったことから「交通安全」のご利益も加わる。

金丸八幡宮では実際、以上のようなご利益が信じられているとのことだった。

それにしても、金丸を「こんのう」と読める人は少ない。神社の石段の下の道路に高い石柱が立っており、大きく「金丸八幡宮」と刻んであるが、帰りにすれ違った若い男女のカップルがこう話しているのが聞こえた。「やっぱり『きんのう』でしょ?」「いや『きんおう』だと思うな」「それ、おかしいよ」

いや、どちらもおかしいですよ、とおせっかいは言わないで、帰途についた。

（おわり）

【この物語はフィクションであり、

実在の人物・団体とは無関係です】





(表紙説明)

■古式畳

格式に満ちた特別な空間をしつらえるために受け継がれてきた古式畳の世界。現代の名工でもある山下光一氏は、古式畳の厳格で優美な技を今に伝える。

有限会社 山下畳商店

所在地／香川県高松市国分寺町新居一六四九五

TEL／〇八七―八七四―〇一〇二

FAX／〇八七―八七四―六九五四

「酒林」随筆特集 第八十七号

平成二十六年一月一日発行

発行人 西野 信也

印刷所 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

# 西野金陵株式会社



## ■酒類部各事業所

- 〔本店〕  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔高松本社〕  
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8 ☎087-835-4133
- 〔高松支店〕  
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
- 〔丸亀支店〕  
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
- 〔徳島支店〕  
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
- 〔松山支店〕  
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
- 〔岡山支店〕  
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
- 〔洲本支店〕  
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
- 〔大阪営業所〕  
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14 ☎06-6877-2671
- 〔東京営業所〕  
〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12 ☎03-3686-4133
- 〔観音寺物流センター〕  
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稲1071-1 ☎0875-56-3133
- 〔多度津工場〕  
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
- 〔琴平工場〕  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔金陵の郷〕  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

## ■化学品事業部各事業所

- 〔大阪本社〕  
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
- 〔大阪支店〕  
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
- 〔東京支店〕  
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
- 〔名古屋支店〕  
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
- 〔北陸営業所〕  
〒918-8231 福井県福井市問屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967
- 〔上海西野貿易有限公司〕  
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548
- 〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO.,LTD.〕  
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng  
klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎+66-2-661-7014

## 〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

- Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend.  
Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA ☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社  
四国・琴平